



東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ
The East Asian-Australasian Flyway Partnership (EAAFP)

国内ツル類コーディネーター通信 第1号

2022年6月



ツル類国内コーディネーター 松本文雄（日本ツル・コウノトリネットワーク）
〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒25線4番2 日本ツル・コウノトリネットワーク事務局
e-mail matsumotobun@gmail.com

◎ラムサール条約登録湿地記念式典と出水のツル渡来地の保全と利活用を考えるシンポジウムが開催

2021年11月18日に「出水ツルの越冬地」が「国際的に重要な湿地を特定するための9つの基準」のうち、「定期的に2万羽以上の水鳥を支える湿地」など4つの条件を満たしていることから、国内で53番目となるラムサール条約湿地に登録されました。登録を記念した式典が2022年1月22日に開催されました。同日の夜には記念シンポジウムが開かれました。式典は子どもたち中心で、司会や発表に加え、関係団体への感謝状贈呈も子どもたちが行いました。

シンポジウムでは、最初に地元の中学生在が小学生のころからのツルに関する自由研究の発表をしました。

続いて二つの基調講演がありました。ひとつは「出水干拓地の歴史とツルたち」と題して、地元出身の歴史作家桐野作人氏が話しました。地域とツルの関わり方の歴史が紹介されました。もうひとつは鹿児島市平川動物公園の福守朗園長が「ようこそツルの世界へ！平川動物公園のツルたち」と題して話しました。平川動物公園で飼育展示されているツルや、出水で保護されたナベヅルの繁殖など、出水のツルの保全に係わる動物園の役割について話されました。

最後に基調講演者と市長の3名でパネルトークが開かれました。ラムサール湿地に登録されたことで、干拓地の見せ方など、賢明な利用（ワイズユース）の方策も考えていきたいという話があり、一方で集中しているツルの分散化をして、あるべき姿に近づけていくことが必要という意見もありました。今後、ラムサール登録をきっかけに様々な取り組みが出て



市長・基調講演者によるパネルトーク

くるのではないかと思います。

◎出水市のツル越冬地利用調整事業

出水市ではツルと共生した新たな地域づくりを目指して2016年度より、「ツルへの配慮」、「地域住民と来訪者との共生」、「鳥インフルエンザ等感染症の防疫」の観点から、とくに観光目的の来訪者に向けてツル越冬地への入域制限を行い、より積極的な利用のコントロール（決められた手段・指定ルートでの移動）を試験的に行っています。また、利用調整エリアへの入域料として任意で納入をお願いします（環境省共催）。

2021年度は2021年11月20日から12月19日までの30日間、不特定多数の人や車の立ち入りをコントロールする「利用調整」を試行的に行い、「越冬地環境保全協力金」の納入を任意でお願いしたところ、2,016,000円の協力金が集まりました。この協力金は「ツル越冬地の環境保全」「防疫体制の強化」「ツルの保護管理」に用いられるとのことです。

	ナベヅル	マナヅル	クロヅル	カナダヅル	ソデグロヅル	ハイブリッド	合計
11月6日	7,768	88	5	3	1		7,865
11月27日	15,511	1,314	8	4	1	2	16,840
12月4日	15,145	1,546	8	4	1	2	16,706
12月18日	14,040	1,315	9	4	1	2	15,371
1月9日	12,469	2,182	9	8	1	2	14,671

2021-2022年 出水平野ヅル羽数調査結果（鹿児島県ヅル保護会）

◎2021-2022年ナベヅル・マナヅルの越冬状況

・出水市

2021年10月18日に初渡来しました。5回の羽数調査を行い、結果は上の表の通りでした。最終的に今期の渡来数はナベヅル15,511羽（11月27日確認）、マナヅル2,182羽（1月9日確認）、クロヅル9羽、カナダヅル8羽、ソデグロヅル1羽、ナベクロヅル2羽以上となりました。



出水で確認されたソデグロヅル（左）。右はナベヅル

・周南市

2021年10月23日に初渡来し、最大渡来数は28羽でした。そのうち、幼鳥は4羽でした。

・その他の各地

熊本県玉名市ではマナヅル41羽、ナベヅル8羽、クロヅル1羽が越冬していました。

愛媛県西予市で58羽のナベヅル、4羽のマナヅルが越冬しました。

愛媛県西条市では18羽のナベヅルと1羽のソデグロヅルが越冬しました。そのほか四国各地に飛来が見

られ、100羽程度のヅルが渡来したと考えられています。

紀伊半島の和歌山県や三重県でも渡来があり、長期に渡り滞在していました。

◎2021-2022年北海道のタンチョウの越冬数

北海道が行っている第2回タンチョウ越冬分布調査が2022年1月25日に行われ、総数1,525羽（成鳥1,359羽、幼鳥90羽、不明40羽、飼育個体36羽）が確認されました。野生個体1,489羽の確認は過去最高数となります。ただし、幼鳥数は最近10年ではもっとも少なかったです。確認地域は十勝、釧路、根室管内に留まり、昨年度の調査で確認された日高や胆振管内での目撃はありませんでしたが、実際には両管内でも昨年同様に越冬していると推定されています。

NPO法人タンチョウ保護研究グループが行っている越冬数調査が2022年1月21日から11日間かけて行われ、調査結果として、今年度の確認総数が1800羽（50羽単位）、そのうち幼鳥の数は157羽となりました。北海道の調査より300羽は多くなっていますが、こちらの方が複数日をかけての調査を行っており、実数に近くなっています。

◎高病原性鳥インフルエンザ情報

○国内の発生状況

2021年秋から2022年春にかけて、高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生が多く起こりました。家禽

では12都道府県で25事例の発生がありました。鹿児島県出水市でも2例、隣の長島町で2例あり、ナベヅルの越冬が見られた愛媛県西条市でも3例、タンチョウが生息している北海道釧路市でも1例確認されています。

野鳥に関しては2021年11月19日に出水市のナベヅルの死体から確認されたのを皮切りに2022年5月までに97羽の死亡、もしくは衰弱した野鳥からHPAIが検出されました。また、環境水（出水のねぐらの水など）や糞便からの検出も含めると、106例になります。

地域別では8道府県にまたがり、北海道が69例、岩手県が24例、秋田県1例、福島県1例、京都府1例、鳥取県1例、宮崎県1例、鹿児島県8例と、北日本が多くなっています（鹿児島県は環境試料（水）からがほとんどで死亡野鳥は1羽（ナベヅル）のみです）。

種別ではナベヅル1羽、オオワシ3羽、オジロワシ17羽、クマタカ2羽、ノスリ2羽、トビ2羽、オオハクチョウ8羽、マガン1羽、ヒシクイ1羽、マガモ1羽、カルガモ1羽、ハシブトガラス123羽（58例：一度に複数羽が回収され、検査されています）、ハシボソガラス1羽となっています。例年になくハシブトガラスの回収が多くなっています（死体回収されたガラスの一部しか検査されていないので、実際はもっと多いと思われます）。

北海道釧路市の釧路市丹頂鶴自然公園内でも死亡していたハシブトガラスからHPAIが検出され、5月18日まで臨時閉園しました。

ハシブトガラスの回収が多かった理由は不明です。今年のウイルス株の特徴なのかもしれません。ツル類は発症しにくいのではないかとわれていましたが、後述するように、海外でクロヅルやアネハヅルでの大量死が確認されたように、株が変異するとどのような事が起こるかはわかりません。今後の動向に注意が必要です。

○海外のツルの大量死の事例

・インドでアネハヅルの大量死

インド西部のラジャスタン州ジョードプルとウダイプルで2021年11月に300羽のアネハヅルが死亡したとインド野生生物トラストが報告しています。11月6日カパルダ湿地で56羽のツルの死亡が見つかり、その後、増加していきました。森林局との迅速な連携のもと、獣医師などのチームが現地に動員され、約130羽の病気の鳥が、現場から約5km離れた緊急避難所に収容されたということです。報告によると大量死したのはアネハヅルのみということで、症状として、頭部下垂、身体の反弓、あえぎ声、直腸温の上昇とそれに続く低体温、片側または両側の翼落下、目の出血（角膜の上に白っぽい青い膜が見られる）、食欲不振、脱水、下痢、無動状態などが認められたということです。

（THE TIMES OF INDIAより<https://timesofindia.indiatimes.com/city/jaipur/300-demoiselle-cranes-died-of-bird-flu-in-2-rajasthan-districts-report/articleshow/87809926.cms>）

・イスラエルでクロヅルの大量死

2021年12月にイスラエル北部のフラ湖周辺で鳥インフルエンザにより6000-8000羽のクロヅルの死亡が確認されました。この地区はかつては大きな湖でしたが、灌漑により埋め立てが進み、その後、一部の地域に水が入れられ、水辺が再生された場所です。以前よりアフリカに越冬するクロヅルの中継地となっていました。気候変動やアフリカの環境悪化により越冬数が増え、農業との軋轢も生じてきたこともあり、給餌も行われています。

2021年12月15～16日に数十羽のクロヅルが死亡しているのが発見され、高病原性鳥インフルエンザH5N1が検出されました。その少し前に家禽（七面鳥）からも発生していました。その後、死亡するクロヅルは急増し、12月19日には周辺は立ち入り禁止となり、人への感染も心配されたため、農務省、厚生省

が対策を始めました。

最終的な死亡個体は6,000～7,000羽と推定されました。大量死（アウトブレイク）が始まる前の段階で20,000～25,000羽のクロヅルがいたと推定されています。多くのクロヅルが死亡しましたが、他の鳥は少なく、モモイロペリカン、チョウゲンボウ、ダイサギの死体が確認されましたが、数は多くはありませんでした。

イスラエルでは2021年10月に北部の七面鳥農場で鳥インフルエンザの発生があり、家禽の間に広がっていました。ここから、ツルに伝播したのではないかと推定されています。専門家の話では北西ヨーロッパでは大量死（アウトブレイク）は起こっているので、秋に南下してイスラエルに向かう鳥が、病気を運んでくることは想定される事態ということです。

フラ湖で行われていた給餌については、給餌を中断すると、鳥が全国に分散して、他の地域でもっと高い確率で病気を蔓延させることになり、また、農作物への被害も増大し、ツルと農業の軋轢が大きくなってしまいます。このような状態を繰り返したくないので、給餌は通常通り行いますが、ツルが集中しないように分散させ、給餌場所と水の洗浄・殺菌をできるだけ行うことにしたそうです。

今後、渡り前の防疫や、発生に関する分析を行い、給餌や湿地管理、気候変動などについて議論していく必要があるということです。検査のためのインフラ整備も十分ではないそうです。

イスラエルの鳥類保全のプロジェクトについても影響を与えています。ペリカンの渡りの季節には、イスラエルのいくつかの貯水池で大量の餌が与えられています。同様のアウトブレイクが起ることを予想して、給餌や対策を立てなくてはなりません。中継地が少なければ鳥は集中するので、中継地を増やして、管理していくことも必要です。

気候変動により、より多くのアウトブレイクも予想されるため、国際的な協調も重要となっていくま

す。

以上は、バードライフイスラエルのオンラインの報告から抜粋してお伝えしました。報告会はyoutube上に残っております。

<https://www.youtube.com/watch?v=FEcAFtvhO9E&t=7s>

◎CEPAワーキンググループオンライン勉強会

EAAFP国内ネットワークではCEPA（広報・教育・普及啓発）の推進のため有志のワーキンググループを作り、オンラインで月1回の勉強会を行っています。各サイトの紹介や種別の保全の話などを行っています。ZOOMにアクセスできればどなたでも参加できます。ツル類のメーリングリストに加入されれば、開催日のご連絡をいたしますので、興味のある方は是非ご参加ください。メーリングリスト加入希望の方は事務局まで、ご連絡ください（日本ツル・コウノトリネットワークのメーリングリストと共同のメーリングリストです）。

また、過去の報告についてはYouTubeの「EAAFP国内ネットワークCEPAワーキンググループ」チャンネルでアーカイブを残しています。こちらからもご覧ください。

<https://www.youtube.com/channel/UCxaufw51L9kod5tP4yOY32g>

今後の予定

6月21日（火）17：30-18：30

WATARIDORI飛来地紹介～大阪南港野鳥園～
和田太一（NPO法人南港ウェットランドグループ）

7月23日（土）19:00-20:30

シギチ特集(Youtubeライブ配信)

お願い

このニュースレターは環境省EAAFP事業推進業務のもとで、発行され、ツル類が生息する各サイトに配布しています。皆様の各地の情報を教えていただきたく思います。また、資料、イベントチラシなどを送っていただければ、この通信に同封して配布いたします。



東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ
The East Asian-Australasian Flyway Partnership (EAAFP)

国内ツル類コーディネーター通信 第2号

2022年11月



ツル類国内コーディネーター 松本文雄（日本ツル・コウノトリネットワーク）
〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒25線4番2 日本ツル・コウノトリネットワーク事務局
e-mail matsumotobun@gmail.com

◎渡り性水鳥フライウェイ全国大会の開催のご案内

昨年12月3日から5日に行われた渡り性水鳥フライウェイ全国大会を今年も開催する予定です。昨年はオンラインで行われましたが、今年は会場（東京都内を予定）とオンラインのハイブリッド開催で計画されています。2月頃を予定しておりますが、詳細は決まっておりません。決まり次第、ご連絡いたします。

◎アジア水鳥センサスのお知らせ

アジア水鳥センサス（Asian Waterbird Census）はアジア・オーストラリア地域を水鳥の状況を把握するセンサスとして1987年に開始され、継続的に行われています。今年度は2023年1月7日から22日にかけて行われる予定です。サイト関係者の皆様には調査にご協力いただくことがあるかもしれませんが、よろしく願いいたします。

◎高病原性鳥インフルエンザについて

今シーズンも国内で高病原性鳥インフルエンザの発生が起こってしまいました。2022年10月29日現在の国内の警戒レベルは3（国内複数発生）です。レベル3の場合、以下の鳥は死亡個体1羽から検査されます。

マナヅル、ナベヅル、ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、コクチョウ*、コブハクチョウ*、コハクチョウ、オオハクチョウ、オシドリ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、マガモ、オナガガモ、トモエガモ、ホシハジロ、スズガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ユリカモメ、オジロワシ、オオワシ、クマ

タカ、ノスリ、オオタカ、ハヤブサ、フクロウ

検査で陽性が確認された場合は、一定期間、野鳥監視重点区域に指定されます（陽性個体の採取日から28日間、ただし、家禽から発生の場合は防疫処理が完了したから28日間）

野鳥の発生状況（10月29日現在）

回収日	回収場所	種名
9月25日	神奈川県伊勢原市	ハヤブサ
10月4日	宮城県栗原市	マガン
10月8日	北海道別海町	糞便
10月11日	福井県南越前町	ハヤブサ
10月14日	宮城県栗原市	マガン
10月16日	新潟県新潟市	ハヤブサ
10月21日	新潟県聖籠町	ノスリ

家禽の発生状況（10月29日現在）

判明日	場所	検体
10月27日	岡山県倉敷市	採卵鶏
10月27日	北海道厚真町	肉用鶏

◎サイト各地から

【釧路】タンチョウ・阿寒湖のマリモ特別天然記念物指定70周年記念イベント

釧路市では市内に生息する特別天然記念物「タンチョウ」「マリモ」が指定70周年を迎えることから市が行っている、タンチョウとマリモの保護活動を紹介した巡回パネル展を開催中です（3月末まで、釧路管内の施設を巡回）。タンチョウに関しては釧路市動物園で取り組んでいるタンチョウレスキュー（傷病救護）を紹介しています。巡回展終了後はパネルの貸し出しも可能ということですので、ご興味のある方は事務局までお問い合わせください。

【出水】ツル越冬地利用調整事業2022

海出水市ではツルと共生した新たな地域づくりを目指して2016年度より、「ツルへの配慮」、「地域住民と来訪者との共生」、「鳥インフルエンザ等感染症の防疫」の観点から、とくに観光目的の来訪者に向けてツル越冬地への入域制限を行い、より積極的な利用のコントロールを行っています。令和4年度は11月1日（火）から令和5年3月12日（日）までの間、利用調整エリア（越冬ツルの生息地）には入域料（車1台1000円）を支払わないと入ることができません。入域料は出水ラムサール条約湿地保全・利活用計画に関わる事業に活用されます。昨年までは期間限定で試験的に行われてきましたが、今年度は越冬時期のほぼ全期間で行われます。このような試みは、国内では珍しいと思います。

◎世界のニュース（EAAFPニュースレターより）

○仁川タンチョウネットワーク設立

韓国の仁川（インチョン）広域市は韓国で三番目の人口を誇る大都市ですが、自然も豊で、広い干潟もひろがり、多くの水鳥たちの生息地となっています。江華（カンファ）郡では冬期にタンチョウも見られます。2022年1月22日に仁川のタンチョウ保全を目的に「仁川タンチョウネットワーク」発足しました。ネットワークは仁川広域市と13の民間団体から構成されており、仁川におけるタンチョウの越冬を支える生息地の保全や仁川市民へのタンチョウの情報提供と保護のための各種活動の実施、韓国内外のタンチョウの生息地に対する協力などを行って行くということです。発足会には各団体のメンバー70名が参加して、記念式典やワークショップが開催されました。

<https://www.eaaflyway.net/launch-of-incheon-red-crowned-cranes-network-rok/>



江華郡の干潟のタンチョウ ©Heasoo KimEAAFP)
<https://www.eaaflyway.net/red-crowned-crane-welcoming-party-ganghwa-rok/>

○カンボジアの「ツル米」

・イカンボジア環境省はカンボジアの最初のフライウェイネットワークサイトであるアンルン・プリン保護地に住むオオヅルや他の水鳥のために、生き物にやさしい米作りを行う「ツル米」の取り組みを始めました。「ツル米」ガイドラインではツルが好む在来品種を、有機農法で栽培し、野生動物の駆除も禁止しています。収穫された米も販売されるもののほかはツルのために田んぼに残されます。「ツル米」はNGOと協力してプレミアム価格で販売できるように働きかけています。現在は16の農家と協力して、17ヘクタールの水田で試験的に栽培をしています。

<https://www.eaaflyway.net/sarus-crane-rice-in-cambodia/?fbclid=IwAR26qy9uouyi7S2EPuUIKhGc-7AGsYpN3uVjZBMQoFnhJZqie7rhct2GfPw>

お願い

このニュースレターは環境省EAAFP事業推進業務のもとで、発行され、ツル類が生息する各サイトに配布しています。皆様の各地の情報を教えていただきたく思います。また、資料、イベントチラシなどを送っていただければ、この通信に同封して配布いたします。